

## **賛美のいけにえを神に**

ヘブル人への手紙 15-16 節

### **はじめに**

私たちの教会では、毎月テーマを決めています。今月は「礼拝」となります。毎月第一主日の礼拝では、その月のテーマに従って説教をすることになっていますので、今日は「礼拝」についてお話したいと思います。

### **1. 礼拝の原則**

私たちは、毎週日曜日に教会に集まって礼拝をしていますが、これは、聖書を通して神様が私たちに求めておられることだからです。

聖書によれば、私たち人間は、三位一体の神様によって造られました。そして、その神様との交わりに生きる存在として造られました。神様と私たちとの交わりの場が、礼拝です。

しかし私たちの最初の先祖であるアダムとエバが神様の命令に背いて、禁断の木の実を食った時から、私たち人間は罪の性質を持ち、神様との交わりを失いました。

私たち人間は、神様との交わりを失っても、礼拝することを求めています。しかし私たち人間は罪の性質を持っているので、神様を正しく礼拝することができなくなりました。三位一体の神様ではなく、太陽や山などを礼拝したり、木や石、金や銀で作られた偶像を礼拝したり、また王や支配者などの人間を礼拝するようになってしまったのです。その結果、神様の怒りを買ひ、私たち人間には罪と悪、あらゆる苦しみや悲しみがもたらされ、肉体の死と永遠の地獄の刑罰を招くようになったのです。

神様は私たちに、聖書を通して、救いの道と正しい礼拝のあり方を教えています。聖書は神様の言葉です。私たち人間は、神様との交わりを失っているため、自分なりの救いの道で救われようとしたり、自分なりの礼拝の仕方で行ったりしようとし、例えば、難行苦行や善行によって救われようとしたり、目に見える偶像を通して礼拝したりしようとし、しかし、それでは救われませんし、神様に喜ばれる礼拝をささげることができません。ますます罪を重ね、神様の怒りを買ひ、自分の身に裁きを招くこととなります。

私たちはまず、神様の言葉である聖書から、救いの道と正しい礼拝のあり方を学ばなければなりません。聖書が語っている救いの道は、自分の罪を認めて悔い改め、イエス様を神の子、救い主と信じることです。それこそ、神様が用意してくださった唯一の救いの道です。

聖書が語っている正しい礼拝のあり方は、「十戒」の第一戒～第四戒に書かれています。  
①三位一体の神様だけを礼拝する、②偶像ではなく、御霊と御言葉によって礼拝する、③口先ではなく、心から礼拝する、④安息日（日曜日）に仕事や娯楽を休み、神様を礼拝する、

というものです。

では、礼拝の具体的な内容はどのようなものでしょうか。①聖書朗読、②説教、③聖礼典（聖餐、洗礼）、④賛美、⑤祈り、が主なものです。私たちはこれまで礼拝について何回か学んできましたが、今日は特に「賛美」について学んでみたいと思います。

## **2. 賛美の歴史**

### **(1)旧約時代**

旧約時代に、イスラエルの民は神殿での礼拝の時に、神様を賛美しました。特に、神殿に入る時といけにえをささげる時に、賛美をしました。その時に用いられたのが、旧約聖書の「詩篇」でした。

しかしイスラエルの民はやがてバビロンに滅ぼされ、礼拝の場である神殿が壊されてしまいました。その時からイスラエルの民は、「シナゴグ」と呼ばれる会堂で礼拝を始めるようになりました。その後、神殿は建て直されますが、イスラエルの民の礼拝は「シナゴグ」(会堂)での礼拝と、「神殿」での礼拝の二つのあり方で行なわれるようになったのです。

神殿での礼拝は、いけにえをささげることを中心に行われ、様々な楽器を用いて詩篇の賛美が歌われました。一方、シナゴグ(会堂)での礼拝では、いけにえをささげることはしないで、聖書朗読と説教と祈りを中心に行われ、楽器を用いない詩篇の賛美が歌われました。

神殿での礼拝は、華やかで儀式が中心でしたが、シナゴグ(会堂)での礼拝は、簡素で御言葉が中心でした。

### **(2)新約時代**

新約時代の初代教会の礼拝は、シナゴグ(会堂)での礼拝の伝統を引き継ぎました。イエス様が十字架において御自身の命をいけにえとしてささげてくださったので、もはや動物のいけにえをささげる必要はなくなりました。そこで初代教会の礼拝は、聖書朗読と説教と祈り、そして聖餐式を中心に行われ、楽器を用いない詩篇の賛美が歌われました。

しかし初代教会には、詩篇以外にも様々な賛美が歌われるようになりました。例えば、ルカの福音書にある「マリアの賛歌」、「ザカリアの賛歌」、「シメオンの歌」や、パウロの手紙にある「キリスト賛歌」や、ヨハネの黙示録にある「天上の賛歌」などです。

### **(3)中世**

2世紀以後の教会では、様々な賛美歌が作られ、礼拝で歌われていきました。しかし、礼拝の賛美では、楽器は使われませんでした。礼拝でオルガンが使われるようになったのは、9世紀になってからだと言われます。新約聖書には、礼拝の賛美で楽器が使われたという記録はないので、おそらく9世紀まで、教会の礼拝では楽器が使われなかったようです。

中世の時代には、多くの賛美歌が作られ、音楽的にも複雑なものになっていきました。そして賛美歌のほとんどはラテン語で作られ、一般の人には歌うことができず、聖歌隊によって歌われようになりました。しかし一般の人は、聖歌隊が歌っている賛美の内容を理解することができませんでした。ですから中世の一般の人にとっての賛美は、自分の口で歌うこと

ではなく、理解できない言葉の賛美をただ聴くというものだったのです。

#### (4)宗教改革

16世紀になると宗教改革が起こりますが、ルターやカルヴァンなどの宗教改革者たちは、礼拝の賛美を改革し始めたのです。それまで聖歌隊しか歌えず、内容も理解できない賛美を、一般の人でも歌えるように、自国語で、しかも単純なメロディーの賛美へと変えていったのです。

さらにルターやカルヴァンは、詩篇を歌うことを復興させたのです。古代から中世にかけて、多くの賛美歌が作られたため、次第に詩篇が歌われなくなっていたのです。しかし宗教改革者たちは、詩篇は聖書の中にある賛美であり、聖霊によって靈感された賛美であるので、詩篇こそ礼拝の賛美において最もふさわしいと考えたのです。

#### (5)近現代

さらに時代が進んで17世紀になると、ドイツで敬虔主義運動が始まり、賛美は信仰の体験などを歌うようになっていきます。そしてその後、アメリカやイギリスで信仰復興（リバイバル）運動が始まり、賛美は説教の応答、つまり説教の内容と同じような内容になっていきます。そして様々な楽器も用いられていくようになります。

現代になると、黒人霊歌（ゴスペル）が生まれ、若者たちの間でバンド形式のワーシップソングが歌われるようになりました。

これが旧約時代から現代までの、大まかな賛美の歴史と言えます。私たちの礼拝では、当たり前のように賛美歌を歌い、楽器を用いてワーシップソングを歌っていますが、決してこれが唯一絶対のあり方ではなく、賛美は長い歴史の中で様々な変化をしてきたのです。

### 3. いけにえとしての賛美

今日の聖書箇所には、「**私たちは、イエスを通して、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実を、絶えず神にささげようではありませんか。善を行うことと、分かち合うことを忘れてはいけません。そのようないけにえを、神は喜ばれるのです**」とあります。

ここには、「いけにえ」という言葉が出てきます。旧約時代の礼拝では、いけにえがささげられていました。動物の血が流され、それによって人間の罪が贖われ、神様と交わることができたのです。ヘブル 9：22 には、「**血を流すことがなければ、罪の赦しはありません**」とあります。罪の性質を持つ私たちが、聖なる神様を礼拝し交わりを持つためには、いけにえの動物が私たちの代わりに血を流されなければならなかったのです。

今、私たちの礼拝では、動物のいけにえをささげることはありません。なぜなら、イエス様が私たちの罪のためのいけにえとなって、十字架で血を流してくださったからです。旧約時代の動物のいけにえは、やがて現れるイエス様を指し示していたのです。本体であるイエス様が現れ、イエス様が私たちのすべての罪のために血を流してくださったことによって、私たちの礼拝にはもはや動物のいけにえは必要なくなったのです。

しかし私たちは忘れてはなりません。罪の性質を持つ私たちは、本来、聖なる神様を礼拝

し交わることもできない存在であることを！私たちの礼拝は、イエス様の十字架によって支えられているのです。イエス様が私たちの罪のためのいけにえとなって、十字架で血を流してくださったからこそ、当たり前のように神様を礼拝できるのです。私たちはそのことを忘れないために、毎月、聖餐式を守るのです。聖餐式を通して、イエス様が体を裂き、血を流してくださったからこそ、神様を礼拝し交わることができることを覚えるのです。

では私たちは、イエス様がいけにえとなってくださったから、礼拝において何もいけにえをささげなくてよいのでしょうか。そうではありません。今日の聖書箇所にあるように、私たちは「賛美のいけにえ」をささげなければなりません。

また詩篇には、「感謝のいけにえ」「喜びのいけにえ」をささげるようにとされています。私たちは礼拝において、感謝と喜びを込めて、神様に賛美をささげることが求められているのです。

また詩篇 51：17 には、「**神へのいけにえは、砕かれた霊。打たれ、砕かれた心。神よ、あなたはそれを蔑まれません**」とあります。私たちは礼拝において、自分の罪を認め、悔い改めた心を神様にささげることが求められています。だからこそ私たちの礼拝では、「罪の告白」の時間があるのです。

またイエス様は、「**心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛すること、また、隣人を自分自身のように愛することは、どんな全焼のささげ物やいけにえよりもはるかにすぐれています**」(マルコ 12:34)と言われました。今日の聖書箇所においても、「善を行うことと、分かち合うことを忘れてはなりません。そのようないけにえを、神は喜ばれるのです」とあります。私たちは礼拝において、神を愛し隣人を愛する「良い行い」を神様にささげることが求められています。だからこそ私たちの礼拝では、「十戒」を朗読するのです。

また使徒パウロは、「**あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です**」(ローマ 12:1)と言いました。私たちは霊派において、自分自身を神様にささげることが求められています。自分自身を神様にささげる「献身」の目に見える一つの表れとして、私たちは礼拝において「献金」をささげるのです。

## **おわりに**

私たちは三位一体の神様に造られ、神様を礼拝し交わる存在として造られました。しかし私たちは、罪の性質を持ち、神様を正しく礼拝できなくなりました。私たちが神様に喜ばれる礼拝をささげるためには、聖書に聞き従わなければなりません。神様は聖書を通して、神様に喜ばれる正しい礼拝のあり方を、私たちに教えておられます。

イエス様は、私たちが神様を礼拝し交わることができるために、十字架において御自身の命をいけにえとしてささげてくださいました。私たちの礼拝は、イエス様の十字架によって支えられています。そのイエス様の恵みに応えて、私たちも賛美のいけにえを、感謝と喜びのいけにえを、砕かれ悔い改めた心のいけにえを、義のいけにえを、そして自分自身を神様にささげていくことが求められているのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは本来的に、あなたを礼拝することを求めています。しかし私たちは、罪のゆえに、あなたに喜ばれる礼拝をささげることができなくなりました。しかしイエス様によって私たちの罪を贖い、私たちを新しく生まれさせ、聖書を通してあなたが求めておられる礼拝とは何かを知ることができるようになりました。

私たちがイエス様の贖いのゆえにあなたを礼拝できることを、いつも忘れずにいることができますように。その恵みのゆえに、賛美と感謝と喜びをあなたにささげ、あなたの御前にいつも悔い改め、神様を愛し隣人を愛する善き行いに励み、自分自身をあなたにささげて歩むことができるようにしてください。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。